



ドンカメの生ごみ・家畜糞などを発酵させた堆肥「効太郎」

に使っているのが、地元芳賀町の生産者グループ、循環システム研究会（手塚孝夫会長）の会員による堆肥育ちの野菜。堆肥は、農業法人（有）ドンカメ（小久保行雄代表取締役）が、小中学校や商店街から集めた生ごみに、家畜糞・モミガラなどの地域資源を合わせて良質堆肥を製造。これを28人の研究会会員が活用して、健康・安全でおいしい農産物を収穫し、町内の学校給食に納め、消費者に届けています。料亭では、宇都宮市のやすの・荒川・実生・一八が、堆肥育ち野菜のよさに注目して使っています。

## ●野菜の魅力は「甘く、丸ごと元気でおいしい」こと

安野さんは堆肥育ち野菜を使う理由として、甘味・旨味が強いこと、野菜特有の食感のよさがあることをあげます。たとえばカブは、次頁のように糖度が高く、肌が輝き、肉質がち密でなめらかです。このため、「蕪蒸し椀」などの料理に、砂糖を使いません。おいしい素材にシンプルな味つけこそ、だしなどの旨味が重なって、深い味わいが出るからです。

また、写真のように、「蕪蒸し椀」には軸（葉柄）も使って彩りを添えます。皮は歯切れよい浅漬けにして、ご飯の楽しみをふやします。葉も根も果実も「丸ごと元気でおいしい野菜」が、料亭のプロ調理人が選ぶ堆肥育ち野菜のよさなのです。



カブの根も軸も皮も大事に使う

甘味が強く肉質がち密な酒井さんのカブ



野菜の魅力は、甘く、丸ごと元気でおいしいこと